The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	包摂的な子ども支援システムの構築に関する探索的研究ー教育と福祉の越境過程を焦点にー
Author(s)	高橋, 味央
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92923
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　高橋　　味央　　）	
論文題名	包摂的な子ども支援システムの構築に関する探索的研究 ―教育と福祉の越境過程を焦点に―

論文内容の要旨

本研究の目的は，「教育と福祉の融合」を標榜する先駆的自治体でのケース・スタディを通して，教育と福祉の協働による包摂的な子ども支援システムの生成と展開過程を明らかにすることである。コミュニティの中で生じる教育と福祉の多元的な接点に着目し，異質な文脈を有する諸アクターがその境界をどのように越境しながら協働実践を紡いできたのかについて，文化・歴史的活動理論に基づく「越境過程モデル」（香川2015）の分析枠組みを用いて明らかにする。本論文は，序章，第一章～第五章，終章で構成される。

序章では，社会的排除と学校教育の関連，包摂的な学校づくりや教育実践，教育と福祉の関連について先行研究を概観した。昨今は，教育と福祉の分断を是正するために互いの境界を越境する，両者のボーダーレス化やクロスオーバーの具体的方策を検討することが議論の中心となりつつあるという研究動向を確認した。先行研究の課題としては，①ミクロとマクロの関連が描かれていない点，②アクターが抱く葛藤や戦略などその行為主体性を捉えきれていない点，③教育福祉の起点でもある同和教育の実践が，現代の貧困や排除の問題にいかに寄与し得るのかについて明らかにされていない点，④包摂の動的プロセスを捉えきれていないという点が挙げられた。

そこで本研究では，教育と福祉という異質な文脈を有する諸アクターが，その境界をどのように越境しながら協働実践を紡いできたのか，それによりどのような包摂的な子ども支援システムが構築されてきたのか，その生成と展開過程を明らかにすることを主な研究課題に設定した。

第一章では，X市内の同和地区を校区に有するY中学校と，部落解放Z支部や隣保館などの系譜を継ぐ地域組織との接点に着目し，同和教育を起点として，異質な文脈を有する組織や人々がその境界をどのように越境しながら協働関係を構築してきたのかについて，展開過程とアクターの行為を探索した。Y中学校と部落解放Z支部を含む地域組織は，1970年代に起きた差別事象を契機に文脈間の横断が見られるようになった。当初の学校では，文化的動揺と抵抗として，従来の教育方法に固執するという境界の無意図的維持が認められたが，差別事象の再発や児童生徒の荒れを通して，学校の文化的振る舞いに変化の余地を生み出していった。Z地区の当事者との対話によって差別の現実に触れることで，教師自身の行為やアイデンティティ，価値観に変容が生まれていく異文化専有と変革が生じた。さらに，越境によるアイデアとシステムが創出され，Y中学校の教育目標や教育実践に反映されていくという，越境の知のローカライズが見られた。しかしながら，1990年代の実態調査の結果によって学校と地域組織の間に境界が再出現し，互いに組織間関係および自組織のあり方に反省と変革が求められることとなった。地域組織側は，自立と主体性を目指した活動を模索し，1995年の阪神大震災を契機に復興ボランティアという他地域の実践コミュニティへの越境，その学びを福祉のまちづくりへと活かしながら再組織化を図っていった。一方学校は，自組織内での省察によって同和教育内容を再考するとともに，授業改革や多様な人権問題を視野に入れた新たな教育実践を創出していった。双方に自組織を変革・発展させながら，1990年代半ばの「荒れ」や保護者組織という新たなアクターの登場を通して，越境の実践が再始動されていく。以降この地域では，部落問題に限定されない，教育と福祉が協働するコミュニティへと発展を遂げる，越境的対話の拡大が生じていることが明らかとなった。

第二章では，Y中学校でのフィールドワークやインタビュー調査を通して，第一章でみてきた学校と地域組織の越境という歴史的な営為，そこから創出された越境の知が，どのように現代の実践に継承され発展しているのかについて，「学校組織文化の3次元」（今津2017）という概念的枠組みを用いて明らかにした。「形態」については，現在のY中学校では，地域を含めた組織体制，定例会議や慣例行事，教職員の自主学習会を通して，地域組織や地域住民と協働する仕組みが創造されていた。また1990年代に作られた教育目標が現代にも引き継がれ，それを具現化する教育方法として学力保障や集団づくりの取り組みが行われていた。「価値・行動様式」については，「めざす子ども像」を価値基盤として3年間の系統立った人権学習カリキュラムが考案されていた。Y中学校が同和教育の中で培ってきた価値を継承しつつ，現代の人権課題も含めた新たな教育実践が創造されていた。さらにY中学校の教師集団

には，不利な立場にある子どもを中心に据え，生活と教育を一体的にみていくという教育方針，人権を重んじるという価値観が無自覚的前提として浸透しており，それはY中学校の教育実践の基底をなすものとみなされ，現代の若手教員の間にも伝承されていた。学校と地域組織の「越境の知」は，校長や人担などのアクターの存在と伝承の仕組みづくりや，ミドルリーダーの役割意識と実践によって，現代に受け継がれていることも窺われた。また，定例会議に地域組織のアクターが構成員として含まれていたり，授業カリキュラムと地域行事が接続される仕組みづくりが行われていたりするなど，包摂的な教育実践が可能となる支援システムが構築されていることも明らかになった。一方で，形骸化を防ぐという意識やそのための仕組みづくりも顕著であり，地域や子どもを取り巻く環境と状況に合わせて実践の再考を繰り返す，能動的・主体的に学ぶ組織文化を有し続けることが，継承の鍵となることが考えられた。

第三章では，X市内でスクールソーシャルワーク制度が導入されて以降，異なる文脈を有する学校と福祉専門職が，互いの境界をどのように越境しながら協働関係を構築していったのか，その展開過程と子ども支援システムの変容を明らかにした。X市のスクールソーシャルワーク制度は，派遣型から拠点校配置型へ，そして全校区配置型へと拡充が図られてきたが，スクールソーシャルワーカーはそれぞれの局面で質の異なる困難に直面し，それに対して多元的な戦略によって対処していた。最初は，同和教育を推進する小学校の成員から強い抵抗に合う。それは学校が新たな専門職に直面した際，文化的動揺と抵抗が生じる傾向にあるためであった。一方で，スクールソーシャルワーカーは「異文化」である学校組織に溶け込み，ソーシャルワークと同和教育の共通する視点や理念を共有し互いの文化の親和性を明示するとともに，福祉的視点と技術の普及に注力する。そうした中で，教師たちも福祉的な視点と技術を自らの教育実践に取り込みつつ行動様式を変容させていく，異文化専有と変革が生じた。スクールソーシャルワーカーは，同和教育を基盤とする学校と地域組織の教育コミュニティや支援ネットワークなど，既存の支援システムに早期の段階で融合し，そこで生まれた協働実践を一つの学校に留まらず市内全体に波及させていく，越境の知のローカライズと越境的対話の拡大が見られた。異文化への葛藤を乗り越え，学校とスクールソーシャルワーカーが協働関係を築いていく中で，福祉的視点を持って子どもの問題を捉えることの大切さ，場当たり的な対応ではなくアセスメントに基づくプランニングを行うことの必要性など，ソーシャルワークの技術や援助展開が学校現場に根付いていく。同時に，アセスメントシートや校内支援体制図など，教師とスクールソーシャルワーカーとの共同作業によって生まれたアイデアやシステムによって，X市内全体で福祉的支援やチーム支援のまなざしが涵養されつつあった。

第四章では，教育と福祉の接点に立つ個々の教師の実践に焦点を当て，ゲートキーパーとしての葛藤と対処戦略を明らかにした。異なる文脈を有する組織や人々が境界を越えて協働する際に重要な役割を果たすのは，その境界に位置する人物，すなわち「境界連結担当」（佐々木1990）であるとされる。本研究では，ゲートキーパーとしての教師が，排除性の高い学校で多元的な困難を抱えながらも，生活困難層の子どもたちを包摂しようと奮闘し，その中であらゆる対処戦略を駆使し，学校の中で包摂的なシステムを構築していく様子を描き出した。ゲートキーパーの葛藤は，対保護者・子ども，対教師・学校組織，対制度・他職種との間で生じる多元的な構造を成しており，その多くはそれぞれが有する文化の相違で生じていたことが考えられた。また，対教師—教師・学校組織間葛藤では，貧困という問題に立ち向かおうとする教師の信念が，他の教師の偏った平等観や乏しい貧困意識，閉鎖性を帯びる教師文化，官僚制が残る学校組織文化によって阻まれることもあった。一方，ゲートキーパーたちは多元的な困難に直面しつつも，実践の中で従来の教育観を手放し，柔軟な価値観や確固たる信念，新たな役割を獲得していく肯定的な意識変容を経験していた。さらにその新たな意識を基盤に，包摂のための多元的な対処戦略を編み出していくといったプロセスを経ていた。生活困難層の子どもや保護者の生活状況に直接触れ合うという教師経験は，葛藤や困難を生み出す場面となる一方で，肯定的な意識変容をもたらす契機にもなり得る。そのためには，同僚や管理職の理解やサポートが重要であると考えられた。最後に，現代の教育と福祉のゲートキーパーを担う教師は，保護者や子どもをエンパワーする他，家庭—学校—専門職といった異なる文化を有する集団と組織の接点で，それらを媒介したり，教師の同僚性を高めながら学校組織を変革させたりするなど，学校内外での多層的な教師役割が付与されていることも明らかになった。

第五章では，マクロ的な視点に立脚し，X市の教育委員会と子ども福祉行政の組織一元化に焦点を当てた調査研究を行った。改編された組織内で，異質な文脈を有する教育関係者と福祉関係者がどのように協働関係を構築してきたのか，さらには組織一元化や協働関係の構築によってどのような子ども支援システムが生成されたのかについて明らかにした。まず，X市の行政における教育と福祉の組織改編は，幼保一元化から始動した。当初は，幼稚園教諭と保育士との間に，互いの職業への誇りや視点の相違などから分断や軋轢が生じるといった文化的動揺と抵抗が見られたが，人事交流や研修の実施，境界に立つアクターを各組織に配置するなどの戦略によって，互いの文脈間を

横断する越境実践が始まった。その改編後には，多くの一般行政職が教育委員会に移籍したことによって，「教育畑」と「行政畑」のアクターによる文脈間の横断が再びみられるようになっていく。最初は両者の間にある使用言語や視点，価値観の相違などが明確になり，互いに葛藤を抱える文化的動揺と抵抗が浮上した。しかし，「行政校長」としての経験を通して学校現場を知る機会を得るとともに，両者で幾度とない議論を重ねることによって，違いを理解しつつ相手の文化を受け入れ，「子どものために」という共通理念のもとで協働関係を築いていく。そして，エビデンスの確保と施策立案の技術に長ける「行政畑」と，学校の現状と教育実践方法の知識・技術に長ける「教育畑」とで「教育と福祉の融合」による継続的・連続的な子ども支援を志向していく，異文化専有と変革が生じる。両者が長所を活かし合い相手の視点を自らの実践に取り込むという越境の知のローカライズによって，新たな教育施策や福祉施策が考案・実行され，X市の教育・福祉の発展に寄与することになった。さらには，子どもの貧困対策が展開され，学校で不可視化されやすい子どもの教育・福祉的課題を可視化し，学校と協働することで子どもたちの不利の連鎖を防いでいく，包摂的な子ども支援システムが構築されていた。これは，越境的な実践が他のテーマや活動に拡がるといった越境的対話の拡大であると捉えられた。

以上の結果を踏まえて，終章では総合考察を行い，①越境による自組織の変革と新たな実践の創造，②同和教育を起点とする包摂的な文化の醸成とミクロ・マクロの連結，③教育と福祉の境界に立つアクターの行為主体性について整理した。従来，協働とはある目的に向かって両者が協力関係を築いていくという意味が中心に据えられてきた。しかし，本研究をとおして，教育と福祉の協働とは，異質な文化に触れ合うことで，熟達した実践やそれまでのコミュニティのあり方が激しく揺さぶられ，崩れていく過程でもあった。その際，変化を恐れて異文化に抵抗しつつも，異なる文脈を横断することによって自組織の文化に変化の余地を生み出し，越境的対話や新たな関係性，共有目標や実践知が創出される，そうした過程が見られた。そうした越境による学びを生み出すためには，多職種・多集団で構成される研修や会議，Z支部やNPO法人が開催するワークショップに行政関係者が参加する取り組み，子ども若者の教育福祉的課題に対する実態調査や支援検討を行政・学校・NPOで共に行う場などの仕組みづくりが必要となることも明らかとなった。古くて新しい歴史的課題といわれてきた教育と福祉の関係を問い直すには，自文化が揺さぶられる経験をしつつ，それを乗り越え，今までにない実践を生み出していく，そうした越境としての協働のあり方が求められている。自文化のあり方を問い直し，自組織にも他組織にも見られなかった，新たな越境の知と実践を創造していくことが，教育と福祉の接点で生じる協働の意義であるといえる。そしてその仕組みをいかにして作り，継承していくのかが重要な鍵となるといえる。

また，同和教育を起点とする越境が絶えず行われてきたことから，①社会的不利な立場にある子どもを中心に考えるという包摂的な価値規範や行動様式，②互いの組織間で情報や意見を交換し合う関係性と場，③変革を恐れず再建を繰り返す組織文化が醸成されていた。X市では「越境的対話の拡大」によって協働実践はさらなる段階へと発展を遂げているとともに，越境過程で得た協働関係によって，教育と福祉におけるミクロとマクロのゆるやかな連結が図られていたことを述べた。

最後に，越境や境界横断に関する研究において，その狭間に立ち，組織内外で情報の収集や伝達を行い，両者を媒介する者の存在が注目されてきた（Wenger1998，山倉1993，佐々木1990）。本研究においても，同和担当教員やスクールソーシャルワーカー担当教員など，境界に立つアクターの営為が散見され，越境の際の役割の大きさが明らかとなった。また，本研究では両者の狭間に立つ教師のみでなく，それぞれの境界に立つアクターが，自文化の特徴を相手にわかる形で変換して伝えること，他文化の特徴を自文化の成員が理解できる形で取り込むこと，そしてその越境実践を自文化の後継者に伝承していくことなど，従来の教育と福祉の協働に関する研究で捉えられていたアクターの役割よりも多岐にわたる重責を担っていることが明らかとなった。そうしたゲートキーパーがどのような制約や負荷を受けているのか，その中でどのように行為主体性を発揮し，実践を紡いでいるのかについて，その詳細を明らかにしていくことが求められているといえる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　高　橋　味　央　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	志水　宏吉
	副 査	教授	髙田　一宏
	副 査	教授	稲場　圭信

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、「教育と福祉の融合」を標榜する先駆的自治体のケース・スタディを通して、教育と福祉の協働による包摂的な子ども支援システムの生成と展開過程を明らかにすることである。X市というコミュニティの中で生じる教育と福祉の多元的な接点に着目し、異質な文脈を有する諸アクターがその境界をどのように越境しながら協働実践を紡いできたのかについて、「越境過程モデル」（香川2015）の分析枠組みを用いて明らかにした。

本論文は，序章，第一章～第五章，終章で構成される。

序章では、社会的排除と学校教育の関連、包摂的な教育実践とそのための教育と福祉の協働についての先行研究を概観し、課題として、①ミクロとマクロの関連が描かれていない、②アクターが抱く葛藤や戦略などその行為主体性を捉えきれていない、③教育福祉の起点でもある同和教育の実践が、現代の貧困や排除の問題にいかに寄与し得るのかについて明らかにされていない、④包摂の動的プロセスを捉えきれていないという4点を指摘した。

第一章～第五章が本論である。

第一章では，X市内の同和地区を校区に有するY中学校と、部落解放Z支部や隣保館などの系譜を継ぐ地域組織との接点に着目し、同和教育を起点として異質な文脈を有する組織や人々がその境界をどのように越境しながら協働関係を構築してきたのかについて考察した。

第二章では、Y中学校でのフィールドワークとインタビュー調査を通して、創出された越境の知がどのように現代に継承され発展しているのかについて、「学校組織文化の3次元」（今津2017）という概念的枠組みを用いて明らかにした。

第三章では、X市内でスクールソーシャルワーク制度が導入されて以降、学校と福祉専門職が互いの境界をどのように越境しながら協働関係を構築したのかを検討した。

第四章では、教育と福祉の接点に立つ個々の教師の実践に焦点を当て、ゲートキーパーとしての葛藤と対処戦略についての変容過程を明らかにした。

第五章では、マクロな視点に立脚し、X市の教育委員会と子ども福祉行政の組織一元化に焦点を当て、その協働的な構築過程の解明を試みた。

以上をふまえ終章では、①越境による自組織の変革と新たな実践の創造、②同和教育を起点とする包摂的な文化の醸成とミクロ・マクロの連結、③教育と福祉の境界に立つアクターの行為主体性の3つのテーマに関して総合的な考察を行った。

本研究は、特定の自治体における教育と福祉の連携・協働という今日的課題に敢然と切り込んだ意欲的なものである。自身がスクールソーシャルワーカーを務めるなかで培った人間関係・人脈を生かして実施したインテンシブかつエクステンシブな聞き取りから得られたデータの質と量は圧巻というほかない。また、「越境過程モデル」と呼ばれるものをすべての章に共通する分析枠組みとして設定し、統一的観点から多様なレベルにおける人々の相互作用を的確に整理・記述した腕前もきわめてたしかなものである。本研究が生み出した知見は、「教育と福祉の統合」という現代的イシューにとって多くの示唆を与えるものであり、これまでの教育学・社会福祉学分野に大きな学問的貢献をもたらすものだと確言できる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。